ばく通信　No.13

2021．６月　　特定非営利活動法人　発達障害児応援団　ＮＰＯばく

ばくを開設して 13 年。コロナ感染予防のための苦戦が続いていますが、賛助会員の皆様の応援とともに、持続化給付金等もいただき、運営していくことができています。さらには、今までとは違った方法…ズームを併用した指導・会議・研修等にもチャレンジしています。6月1日時点で通算 181 人の子ども達の学習支援を行いました。また、相談・検査・講師派遣依頼だけでなく様々な問い合わせの電話やメールをいただいています。ばくが困り感のある人だけでなく支援者の心の拠り所の一つになっているようでうれしく思っています。しかし、スタッフが常駐していませんので、ご迷惑をおかけしていることもあるかと思います。そこで、寄せられた質問・疑問にQ＆Aでお答えしていきたいと思います（ホームページを通じて発信していければと考えています）。

Q　ばくの支援対象は？

A　**幼稚園年長～小学生が中心です。**NPO を始めた時の私たちの願いは「読み書き計算の土台を作る時期」（低学年）や「抽象的な思考が必要とされる時期」（9歳の節目）でのつまずきを軽減させることで悪循環（分からないからやらない。やらないから分らない）を止めたい、小さな「わかった」をつみあげて、学齢期の発達課題である勤勉性を育てたい等でした。

しかし、中学校への移行支援や継続支援を求める声が多くなったので、現在では**中学生になっても学習支援を継続するケース**がふえてきました。

また、**ばくの修了生**を対象とした**“ほっとルーム”（相談や座談会等）**を開設して、中学生・高校生・青年期の進路相談やカウンセリングも行っています。

Q　中学生からの指導は可能ですか？

A　**“不登校支援”の枠組み**で支援しています。ばくの不登校支援はカウンセリングと学習支援を組み合わせて行うところが特徴です。また、保護者と学校の依頼があれば、在籍校での事例検討会にも参加しています。

活動報告

現在スタッフは 16 名。学習支援担当と相談担当（公認心理師等）がペアになって、1組の親子を支援しています。総会の時期（5月）には、1年間の指導を振り返り、事例集を作成してよりよい支援の在り方を模索し続けています。その一部を**抜粋**してご紹介します（事例報告は個人情報保護の視点で整理しなおし、**保護者の同意**を得ています）。

不登校支援　A児**（指導期間　小6～中2）**

話しことばでは年齢相応の論理的な説明が可能でありながら、書きことばでの表現には課題があった（時系列や逐次的表現が中心で、並列や対比等の情報を整理する枠組みのレパートリーが少ない）。背景には、不登校（小1～登校渋り　小4～不登校）により、系統的な言語教育に触れる機会が少なく、学習言語が身についていないことが推測された。

そこで、調べ学習（アイパッドを使って黙読で読み、新規の単語や読みを WEB 検索や辞書機能を使って調べる）と表現活動を中心に指導をした。

指導者が提示するテーマについて、WEB の情報を使って調べ、分類・比較を行った。指導者が分類のモデルをみせ（モデリング）、順序だてて説明させる、対比・予測・予想を考えるよう促す等のサポートを行い、ことばで概念を説明することを練習。また、A児が調べた対象物の違いを図示する、記号を用いてメモを取る等視覚的に整理しやすくするサポートを行う。

例）エジプト展を見学し、「どうやって石を掘ったのか」と疑問を持つ。

当時の金属加工術について、調べて文章化。指導者は酸化還元について理科的な説明を加え、鉄や青

銅等他の金属についても、柔らかさや融点を調べるよう促す。指導者が内容を表にして比較することで、エジプト人が鉄を扱えた理由について納得した。

文章化・視覚化支援を繰り返すなかで、A児は「だから」「なぜだろう」など論理を展開する書きことばを適切に使って文章を組み立てられるようになってきた。自分の考えを一度外に出して客観的に見る経験の積み重なりが、学習言語の獲得につながったと考える。

移籍を支える支援　B児（小2～小6）

授業中の離席や宿題ができないことが主訴。背景には　語彙が少ないことや数の概念形成や眼球運動等が影響していると思われた。そこで、「まちがいさがし」や「しりとり迷路」などを取り入れながら、**学習に向かう姿勢**を育てていった。さらには,色や動作、味を表す言葉を練習したり、お金そろばんや買い物ごっこを行ったり等の**具体的**にイメージできる教材を工夫することで学習への苦手意識は軽減されていった。読解問題やパソコンを使ったビジョントレーニングにも集中して取り組むようになった。しかし、**抽象的**な語彙を覚えることは難しかった。学校では授業中に度々トイレに行ったり、落書きしたり等の問題行動がでた。

移籍への抵抗は親子共々あったが、小4で移籍。「友達と遊べない」と寂しい気持ちをばくで訴えたりした。しかし、移籍以降は、トイレで過ごしたりすることもなくなり、ばくでも落ち着いて学習に取り組むことが増えた。物語文を読んで主人公の裏の気持ちを読み取ったり、接続語・指示語・比喩等の学習にも取り組んだりできるようになってきた。小6になるとパソコンで修学旅行の下調べをしたり、自分の体調や疲労感の理由を伝えたりすることができてきた。卒業時には母と指導者で、小2の頃との違いに、改めて成長を喜びあうことができた。

具体的イメージを豊かに掘り起こす学びを保証することで、B児は周りの人の気持ちも考えて、自分の考えを伝えることができてきた。具体から抽象的な思考への転換期（9～10 歳）、どのような進路選択するか迷う。しかしこの困惑の時期、保護者の気持ちを受けとめ（相談担当）、子どもの気持ちと学びを支える（指導担当）ことで、移籍は子どもの成長と保護者の喜びにつながるよい選択になったと思う。

時間軸を育てる支援　C 児（小2～中2）

「あ、なつかしい。」中学生になって3回目の指導…部屋の隅にあった教材を手にして C 児が言った。小2からの 5 年間イライラを受けとめてきた筆者は、C 児と穏やかな時間を共有できていることに大きな喜びを感じていた。

C 児は思い通りにならなかったり、欲求が満たされなかったりした時にイライラし、気持ちと行動のコントロールが難しかった。背景には、読み書きの苦手さやこだわり、「今、ここ」の気持ちが全てという時期が長かったことが関係していたように思う。

イライラ感の軽減のためには、3つの方針…多面的な自己理解・時間軸・ポジティブ思考を育てる…を通して自尊感情を育てることが効果的と考えた。ワークシートを作成して考えさせたり、経験を振り返らせたりしてきたがすぐには日常生活への般化はないように思われた。しかし継続して取り組むことにより、「時間軸を育てる」に関して変化が見られた。「2年の時は～だったけど、今はそんなことはしない」と、自分自身を過去と現在の時間の流れの中で考えることができてきた。そのような C 児の変化を目にし、過去、現在に続くよりよい未来の自分を意識できるよう、中学校での学習の意義（算数と数学の違い）や人間関係（小学校との違い）等の学習を行った。

それが、おだやかさやゆとりにつながったのではないだろうか。

静岡県静岡市駿河区大和 2 丁目 6 番 5 号　東京堂ビル 305 号
電話・FAX：054-266-5616（火～金曜日　15 時～19 時 30 分）
賛助会費振込先：郵便口座番号 00810-6-134767　　発達障害児応援団ＮＰＯばく
（一口 1000 円、何口でも）
E-mail:baku@orion.ocn.ne.jp　　URL：http://www.npobaku.sakura.ne.jp